

兵庫県南西部におけるヒサマツミドリシジミの分布

佐々木 薫

昭和8年わが国で初めて採集された本種は、その発見地であった、鳥取市の久松山の名をヒサマツとして採用し、当時は、外国にいない新種ということと、気品のある美しさや、稀少価値から、珍品中の珍品として研究家の憧れの的であった。

その後、昭和30年代後半より各地で盛んとなった、採卵、飼育熱から、卵探しに焦点が移り、昭和40年代に入りその主な食草がブナ科のウラジログシ、であることが判明するとともに、同好者の熱心な食草調査により、全国各地に産地発見が相次ぎ、一挙に分布が明らかになった。

兵庫県下に於いても例外でなく、今までの記録では美方郡温泉町、浜坂町、美方町、村岡町、城崎郡香住町、竹野町、城崎町、日高町、豊岡市、出石郡出石町、但東町、養父郡関宮町、大屋町、養父町、朝来郡和田山町、宍粟郡波賀町、一宮町と日本海側の低山地に広く分布し個体数も稀でない。

瀬戸内海側では標高500m以上を必要として稀種となる。垂直分布は100m～600mであるが、その産地は低地に集中する、とされ県下を南北に二分してみると圧倒的に日本海側に多く産地が発見されているため今後の課題として瀬戸内海側の宍粟郡波賀町、一宮町、千種町、山崎町、朝来郡朝来町、生野町、にはウラジログシの自生地も多く新しい棲息地の調査が望まれている。

播磨蝶友会の結成より9年になりやっと結成当時の計画であった兵庫県下に於ける分布調査の必要種について調査する気持ちになり昨年は当蝶友会の広畑政己氏と一緒に兵庫県南西部に於けるミスジチョウの分布をひろおびNo.6の紙面をかりて報告したが、今回は県南西部に於けるヒサマツミドリシジミの新しい棲息地を調査の結果発見できたので報告する。

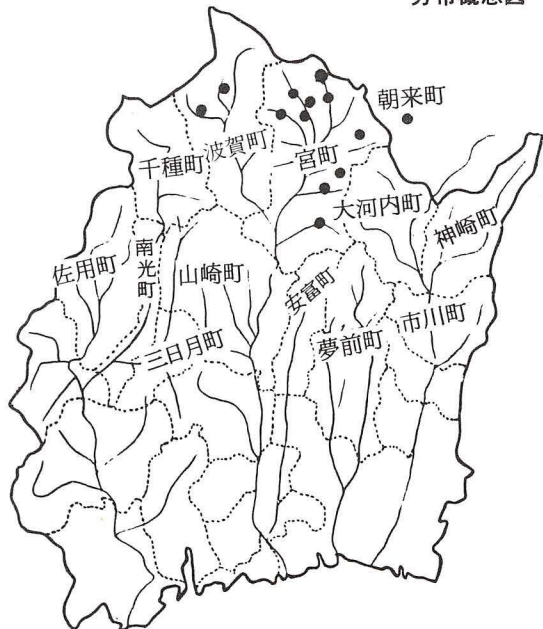
〈採集記録例〉

※宍粟郡波賀町音水	3卵採集6	IV	1977	高田井手
※宍粟郡一宮町富士野	3卵採集17	X	1977	高田
※宍粟郡一宮町黒原	33卵採集18	III	1979	佐々木
宍粟郡一宮町草木	13卵採集24	II	1977	川崎
宍粟郡一宮町福野	12卵採集24	II	1977	川崎

宍粟郡一宮町大路	15卵採集20	III	1982	佐々木
宍粟郡一宮町志倉	14卵採集7	III	1982	佐々木
宍粟郡一宮町樅ノ木	28卵採集28	III	1982	佐々木
宍粟郡一宮町阿舍利	18卵採集4	XII	1982	佐々木
宍粟郡波賀町原	6卵採集22	X	1983	佐々木
宍粟郡一宮町福知	2卵採集3	XII	1983	高島
宍粟郡一宮町溝谷	20卵採集11	XII	1983	近藤

朝来郡朝来町神子畑 6卵採集23 IX 1982 佐々木
(神子畑は県南西部外であるが、過去の発表がなかったように思いますので報告しておく)

兵庫県南西部に於けるヒサマツミドリシジミの分布概念図



以上県下南西部9ヶ所と朝来町1ヶ所のヒサマツミドリシジミの新しい棲息地として報告しておく、又今回は発見出来なかったが、山崎町、千種町、には数回にわたって調査に入ったが採集することが出来なかったが、食樹のウラジログシの自生地も多く更に今後の

調査が望まれる。尚採集した卵は全採集地のものとも羽化に成功したことと、羽化した早の内約10%程度の個体はB型で残りはAB型であったことも報告しておく。最後にこの報文をまとめるにあたり、資料の提供や調査に当ってご協力いただいた高島明氏と播磨蝶友会の八木弘、川崎悟良、尾崎勇、苦木隆幸、入江照夫、広畑政己、岩村巖、近藤伸一、各氏に心よりお礼を申しあげる。

参考文献

- (1) 松岡嘉之、三島寿雄：大山の蝶
- (2) 高田忠彦、井手敏晴：兵庫県産蝶類調査報告
〔1〕シジミチョウ科その1
- (3) 佐々木薫：宍粟郡一宮町にヒサマツ
ミドリシジミを求めて
ひろおびNo-5

KAORU SASAKI

〒678 兵庫県相生市

ヒメアカタテハの移動調査についてお願い

近 藤 伸 一

ヒメアカタテハの移動調査は、千葉県柏市の松井安俊、松井英子両氏が、一昨年より実施されていますが、まだ標式虫は採集されていません。この調査は多人数で実施しなければ不可能と思い、私も本年マーキングした成虫を放す計画をしています。採集された方はぜひ一報をお願い致します。(標式は左後翅裏面に×印、右後翅裏面は番号)

なお松井氏からの連絡によると、両氏が現在までに放された場所と標式は次の通りで、採集に出かけられた時には、ヒメアカタテハにも注意を払って下さるようお願い致します。

石垣島	I 001～I 030	1983.4.23～24(左後翅裏面)
〃	I 041～I 105	1983.5. 9～11(右後翅裏面)
千葉県柏市	(25頭)	1982.4.20～5.12(〃)
〃	001～ 200	1982.6. 4～18(〃)
〃	401～ 432	1982.9. 1～7 (〃)
〃	501～ 536	1982.10.14～11.3((〃)

Shinichi Kondo 〒674 神戸市

南光町船越でアサギマダラの越冬幼虫を確認

広 畑 政 己

1983年1月3日に船越にて本種の越冬幼虫6頭を確認したので報告する。幼虫の令数は定かではないが、大きさは10mm程度のもから15mm程度のもまでさまざまであった。食草のキジョランは、寒さのため葉は内側に筒状に巻きこんでおり、幼虫はその中に潜んでいるので、これによって幾分寒さから守られているようである。暖かい日には摂食しているのか、新しい食痕も確認できさ。

本種はこれまでのデータから、春には低地に現われ、季節が進むにしたがってだんだん高い山にすみかを広げ、秋にはまたふたたび低地で見られることがわかっている¹⁾。また、マーキングをして、種子島で5月31日に放された個体が、46日後の7月16日に福島県の白河市で再捕獲されたり²⁾、4月26日に同じく種子島で放された個体が、27日目の5月23日に三重県の鈴鹿山脈の入道ヶ岳のふもとで再捕獲されている²⁾。これらは夏には北へ移動するのではないかということを示唆する例であるが、反対に10月の20日に鹿児島県市木町で放された個体が、こんどはそれより400kmも南の奄美大島名瀬市で12日目の11月1日に再捕獲されている²⁾。これは、秋には南に移動するのではないかということを物語っている。

このように、高地と低地を稀動する垂直移動と、北方と南方を移動する水平移動が推測できるわけであるが、もうひとつ、越冬をし、土着しているのはどのあたりになるかもはっきりしていないことの1つである。

県下において、冬に本種の幼虫が見つかったのは、この他に加美町金蔵山にて森下泰治氏によって、幼虫が3頭採集されているが、その他の記録は聞かない。しかし、県下でも寒さの厳しい内陸部で越冬幼虫が確認できたということは、食草が広く分布しておれば、広い範囲で土着できることが可能なのである。今後さらに調査を進めていきたいので、県下に於ける採集記録など御教示いただければ幸甚である。越冬幼虫の調査に当っては、千種川グリーンライン昆虫館の南海孝一氏には何かと御教示を仰いだ。ここに記してお礼申し上げる。

〈参考文献〉

- 1) 日浦 勇(1983) アサギマダラの旅行
29(6): 7-11
- 2) 福田晴夫(1983) 蝶の長距離移動についての諸問題
やどりが(111/112): 4-5

Msami Hirohata 〒671-22 姫路市